

---

# シーブリーズ

音無 無音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
シーブリーズ

【Nコード】  
N6283U

【作者名】  
音無 無音

【あらすじ】  
【シーブリーズシリーズ第一弾】こんな不良の俺に手を差し出してくれたのは彼女だった。      彼女の手からはほんのりとシーブリーズのグリーンアップルの香りがした。

こんな不良の俺に手を差し出してくれたのは彼女だった。

彼女の手からはほんのりとシーブリーズのグリーンアップルの香りがした。

彼女はその手で俺に白いハンカチを渡してこういった。

「大丈夫？」と。

心配されたことなかった。

だから対応に困った。

俺は適当に

「あ、ああ」

と相槌を打って、そっぽを向く。

服についていた泥を綺麗な綺麗な真っ白のハンカチで落とす彼女。

もったいない、って思ったんだ。

「さ、とれた」

と微笑んで、バッグに手をやる。

取り出したのは絆創膏。

それを切れていた俺の口の端へピッと貼る。

「これでもう大丈夫だね」

と、また微笑んだ。

綺麗な笑顔。

「何か困ったことがあったら、私に構わず言ってね」

その綺麗な笑顔のななかさん。

首を横にかしげて続けた。

「道野瀬くん」

最初は どうして俺なんかの名前を知っているのかと思った。

そう思うなら、こころも思う。

なんで俺なんかに手を差し出してくれたのだろう？

「私を頼ってもいいけど、もう心配させないでね」

見ていてくれた。

心配してくれた。

そう言っただけで彼女は立ち上がる。

片手を出し、さあ立って、とばかり。

俺は彼女の手を掴み立ち上がる。

動いたときにまた、あのグリーンアップルの匂いが確認できた。

彼女は俺の手を離さない。

「あのね」

「？」

「・・・、なんでもない」

そうはにかむ。

俺の青春は、甘酸っぱいグリーンアップルと共に訪れた。

（後書き）

りんごの臭い飽きねえか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6283u/>

---

シーブリーズ

2011年10月3日11時18分発行